

# 詩誌『詩学』の世界

——はじまりの10年

宮 崎 真素美

『詩学』は、敗戦後から平成に至る六〇年（昭22・8〜平19・9）の長きにわたって月刊詩誌として刊行された。編集人のひとり城左門は、創刊号の「編輯後記」において「『詩学』の目的」を、「詩壇の公器的存在たらしめようとする」、「広く文学的総合誌たらんとする野心抱負」、「詩精神を以て貫かれた総合誌」、「他面の導入に依つて詩それ自体を培はうとする」と述べた。これらは、前身誌である城らの詩誌『ゆうとびあ』（昭21・9〜22・5）においても共有されてきた志であった。このうち、特に「詩壇の公器」を軸に戦時下の詩誌との関係性に着目した杉浦静「概説・へ詩壇の公器」の再生―「戦後詩」誌の初発<sup>①</sup>―によれば、『詩学』が「詩壇の公器」を目指す背景には、「戦中の公器的存在に対する否定」があり、それは、敗戦前年、昭和一九年六月に詩誌の統合によって生まれた『日本詩』と『詩研究』が、「国策遂行への翼賛雑誌」として担った役割への批判的な意識化を意味している。また、『詩学』と同様の意味合いで「詩壇の公器」を目指した敗戦後創刊の詩誌（『現代詩』『蠅人形』）もありながら、『詩学』が残った要因として次のような分析もなされている。

その要因は、既成詩人のみではなく、荒地グループを始めとする戦後意識を明確に自覚する詩人たちをも擁し、詩学研究会による新人の発掘のシステムをもったことなど、複合的であったが、今一つ、初期においては、「宝

石」で成功していた岩谷書店の資金力が背後にあったことも忘れてはならないだろう。この時期、いくつもの詩誌が、経済的理由で立ちゆかなくなっていたのであるから。

恵まれた外的要因も味方に付けて、『詩学』は影響力を持つ詩誌として受け入れられてゆく。本稿ではまず、その最初の一〇年にあたる昭和二〇年代を対象として、これまで指摘されていることがらの内実、そして、あまり触れられてこなかった試みについて照らしながら、同誌におけるエディタースhipの糸口を捉えてみたい。なお、創刊号・六巻三号の二冊は神奈川近代文学館所蔵、そのほかは愛知県立大学所蔵の『詩学』を用いた。

## 1 近代詩史との接続

一卷一号（昭22・8）の扉写真は、島崎藤村の詩集三冊（『若菜集』『夏草』『落梅集』）の書影ではじまる。近代詩の曙と一般的に位置づけられる藤村の詩業とそれにまつわる解説を創刊の扉に置いたところに、正統的な詩史における連続性や「学」としての啓蒙的な側面を受けとることができる。以降、『詩と詩論』などを挟みながら、五巻六号（昭25・7）の『日夏耿之介定本詩集』（大15）に至るまで、明治以来の詩集書影と解説が扉に置かれており、その後、それらは「編輯室」や地方詩壇の集い、出版記念会の写真などへと代えられてゆく。

詩史における連続性や接続は、そうした作品を生み出した「人」とのつながりでもある。この点を創刊号を例に捉えてみると、佐佐木信綱「故人抄」がそれに照応している。「詩は人なり」、「新体詩抄の作者三人のうち、二人を知つてをる」、「作者のはつかかな面影をうつさうと思ふ」として、「外山正一先生」「井上哲次郎先生」「湯浅半月翁」「山田美妙君」の「面影」を順に述べてゆくあり方に愕くのは、ここで取りあげられている人物の実像を佐佐木が身近なものとして語り得ていることである。明治一五年に出版され、わが国近代詩の草創期に位置づけられる『新体詩抄』が、漢詩を意味していた従来の「詩」に対し、行わけの日本語による詩（大半は翻訳詩）を「新体の詩」と名付けてあらわしたこ

とは、一四〇年が経過した今日においてはもはや文学史の中の出来事であるが、『詩学』創刊時からは六五年前、この時七五歳の佐佐木には語り得ることだったのである。ましてや、扉写真に登場している藤村の『若菜集』は『新体詩抄』から一五年ののち、明治三〇年に出版されているのだから、その折二五歳の佐佐木にとっては同時代的な青春の詩集そのものとなる。この文章の時点ではみな物故者であり、なかでも山田美妙は四〇代で亡くなってしまったために錯覚しやすいが、ひとり「君」付けで記されているとおり、実は佐佐木より四年年長であるだけの同世代である。佐佐木その人を考えてみても、白秋や芥川らに影響を与えた『梁塵秘抄』を明治四四年に発見した人物だったのだから、そう考えてみると合点のゆくことではある。

『詩学』を考えてゆくととき、こうした視点は留意すべきことと思われる。近代詩草創期は、『詩学』創刊時から実感を伴った連続性を持つて捉えることが、「人」をとおしてまだ可能であったのだった。そして、それが可能な内に意識化しておくといった姿勢が、扉写真にもあらわれていたのだろうと推測できる。中桐雅夫「マチネ・ポエチック批判」(2巻4号 昭22・11)においても、押韻の例として『新体詩抄』からの流れが冒頭からすらりとあげられており、吉田精一「草創期の詩人たち」(3巻5号 昭23・6)もそのひとつにあげられる。

また、この期の『詩学』誌上に登場する詩人たちを試みにあげてみると(以下、括弧内は生年)、明治期半ば以降から後期に生まれた村野四郎(明34)、西脇順三郎(明27)、北園克衛(明35)、金子光晴(明28)、大正一〇年前後の中村真一郎(大7)、鮎川信夫(大9)、中桐雅夫(大8)、木原孝一(大11)、そして昭和初年代の白石かずこ(昭6)、谷川俊太郎(昭6)、茨木のり子(大15)、友竹辰(昭6)、川崎洋(昭5)、吉野弘(大15)、大岡信(昭6)といったように、およそ三層にわたる幅広い年代が参加している。このことが、後述するように『詩学』の果たした役割のひとつとして知られる「詩学研究会」での新人育成につながっているものであり、「史」を内包した「人」を介してさまざまな「接続」のおこなわれているさまが見て取れる。

## 2 マチネ・ポエティク

戦時下からの接続という側面からは、押韻定型詩の創作発表を、昭和一七年に朗読会の形式ではじめた「マチネ・ポエティク」参加詩人たちの作品が創刊号から掲載されている点も注目される。ソネット形式の加藤周一「別れの歌 第三」、窪田啓作「SONET Op. II」がそれに当たり、いずれにおいても作品末尾に「(一九四二年)」、「マチネエ・ポエティク作品」が付記されている。次号(1巻2号 昭22・9)にも同様に、原條あき子・枝野和夫のマチネポエティク作品が掲載され、中桐雅夫「マチネ・ポエチック批判」(2巻4号 昭22・11)、「特輯 日本詩の韻律の問題」(3巻4号 昭23・5)を呼び、『マチネ・ポエティク詩集』(昭23・7 真善美社)発刊をあいだにおいて、瀬沼茂樹「果して「詩の革命」か?—マチネ・ポエティク批判—」(3巻10号 昭23・12)、中村真一郎「マチネ・ポエチックその後」(5巻3号 昭25・4)、鮎川信夫「中村真一郎の「詩集」について」(5巻10号 昭25・12)へと至っている。

マチネ・ポエティク作品の掲載を受けた中桐雅夫「マチネ・ポエチック批判」では、前節で触れたとおり、『新体詩抄』をはじめとする明治期新体詩における押韻を例示ののち、掲載されたマチネ・ポエティクの作品などを実際に取りあげながら、形式先行のために不自然さが生じ、その詩が有する本来の良さを損なう可能性を指摘、ソネットの必然性が理解できないと結論している。

一方、マチネ・ポエティク参加詩人らをふくんだ座談会「日本詩の韻律の問題(加藤周一・中桐雅夫・窪田啓作・鮎川信夫・相良守次・湯山清・城左門・岩谷満)」(3巻4号 昭23・5)において、城左門がマチネ・ポエティクの活動について「古臭い」と述べたのに対し、鮎川信夫は「詩そのものに対しては古臭い」と思うが、「運動として見ると非常に面白いし、色々な意味で注目」していると述べている。鮎川のこの捉え方は、二年後の「中村真一郎の「詩集」について」においても、マチネ・ポエティクの詩人たちが仲間を持つては幸いであり、共通した経験を持つてい

ることは重要であると述べ、当時において意識せざるを得ない党派制に関しては、個性や年齢だけを尺度にしていないところを評価する一方で、実作に関しては、その思想性において相容れないとする点も変化がない。理論を先行させた作るための詩であることを、「美という観念を持つてゐるために、美を発見することが出来ないように思われる」と言い、中村の『詩集』に収録されている戦時下の詩篇と戦後の詩篇とに、その内容においてまったく異なりがないと指摘、三好豊一郎の『囚人』にながれる思想性との「相異」が、「荒地」とマチネ・ポエティクとの「相異」というものを象徴的に物語つていて面白い」と結んでいる。田口麻奈は、こうした鮎川信夫のマチネ・ポエティクの捉え方について、「文学的経験をグループの紐帯とする点」が、「鮎川にとつての深い共感の対象」であつたとし、マチネ・ポエティクと「荒地」とが、「方法論の上で対立しながらも同じ問題系（論者注・「特権的な共同性への批判」と作品の「現代性」への「疑念」）に圍繞されていた」という見立てにおいて接続され得ると整理している。

また、マチネ・ポエティクは当時において、「マチネ・ポエチックを見たまへ。結局、あれはハシカに過ぎなかつたのだ、それも舶来のハシカだ。あの熱ぐらるでは現代詩の沈滞した悪血を潔める何のたすけにもならぬ。さらにチブスでもわづらつて幸にも生きのびて居られたら、マチネ・ポエチック氏も一人前になれるであらう。」（『詩壇時評』4巻2号 昭24・2）といったような悪態をつかれる対象でもあつた。中村真一郎「マチネ・ポエチックその後」は、こうしたところを経過して、「一九四〇年から一九四五年までの文学グループ「マチネ・ポエチック」は、戦争終結後、戦時中の実験的作品を大部分発表して、社会の批判を仰ぐと共に解散し、戦後の現実の中で、同人夫々が別個の方向へ活動の圏を拡げて行つた」、「方法そのものは可能性がある」、「戦争中の筆者の心の閉鎖的な姿勢と余りに調和してゐたその詩法は、戦後に至つて、心を外に向つて開かうとした時、自己を束縛するものと感じられて来た」、「詩作が第二芸術の段階に堕ちた」、「現代日本語の貧しさと荒さとは、具体的には、第一に概念の混乱、第二に音感の不快さ、である」と、内省的かつ他罰的な吐露に至つた。『詩学』は創刊からの三年間をとおして、マチネ・ポエティクとともに、その結着を見届けたと言える。

### 3 同時代詩人評

近代詩史への接続、同時代的なトピックであるマチネ・ポエティクへの批評的関与に加えて注目したいのは、同時代詩人を積極的に批評の俎上にあげ、批評する側の魅力とともに照らした点である。本稿で対象としている期間の前半では、木原孝一「移動する座標の観測 北園克衛の詩に関するノオト」(3巻1号 昭23・1)、中桐雅夫「菱山修三論」(3巻5号 昭23・6)、黒田三郎「春山行夫論―新しい詩人―」(3巻10号 昭23・12)、鮎川信夫「三好豊一郎論「荒地」の精神的風土」(4巻3号 昭24・4)、田村隆一「囚人」の成立条件について」(4巻3号 昭24・4)といったラインナップで、「北園克衛研究」(6巻6号 昭26・7)として特集も生まれ、「作品」村野四郎、「人間」岩本修蔵、「詩論」黒田三郎といった論者を擁し、安藤一郎・壺井繁治・中桐雅夫・高橋宗近・嵯峨信之・木原孝一による「座談会 北園克衛を分析する」もおこなわれている。この北園特集号の木原孝一による「編輯後記」は、こうした同時代詩人の特集を組む意義を次のように述べ、この試みの新しさを自負している。

この頃、わが邦の詩史的な研究が多く現はれてゐる。吉田精一氏を初め、各出版社が注積的な詩解説書に努めてゐる。この傾向は、徒らに新奇に趨ることよりも現在の必然性を確認する上には甚だ有意義な企画であると思ふ。だが、現存の、それも現役的な立場に居る詩人の史的評価は実に大いに困難なことなのだ。その困難を押し切つて、最初に着手したのが本号の北園克衛研究である。村野岩本、黒田三氏の論説と、安藤、壺井氏に依る座談会である。これで縦横に、詩人北園克衛を同時代人に依つて、流行語で云へばツルシ上げにするわけで、逆に、研究としては略々完璧に近いものなのではなからうか。ご精読を得たい。今後も、この意味で、詩人個人を研究して行きたいと思ふ。

すでに見てきたように、『詩学』自体も詩史的接続には意識的であるなかで、同時代詩人を対象とすることが、さら

に新しい「研究」に結びつくという視点が内外に対して動態的である。『詩学』における「研究」という語彙の新鮮さは、次節で取りあげる「詩学研究会」とも響き合うように目を引く。

この後もやや年長の詩人をふくみつつ、中西浩「高村光太郎論」（6巻11号 昭26・12）、鶴岡冬一「北川冬彦論」（6巻11号 昭26・12）、高橋宗近「金子光晴論」（7巻2号 昭27・2）、服部嘉香「蒲原有明論」（7巻3号 昭27・3）、平林敏彦「小野十三郎論」（7巻7号 昭27・7）、神保光太郎「三好達治論」（8巻5号 昭28・5）、大岡信「戦後詩人論——鮎川信夫ノート——」（9巻5号 昭29・5）、関根弘「伊藤信吉論——孤独な批評家——」（9巻11号 昭29・11）と続いた。

これらのちょうど中ごろにあたる、「北園克衛特集」の翌号で組まれた注目の特集が、「物語詩人追悼特輯——死んだ仲間——作品と回想——」（6巻7号 昭26・8）である。副題どおり、一七人の詩人の作品と回想で構成されているのだが、詩人と回想の書き手との組み合わせもふくめて興味深い特輯と思われるので、以下掲載順にあげてみる。

立原道造／中村稔、野村英夫／鈴木亨、逸見猶吉／緒方昇、津村信夫／杉山平一、加藤千春／井上長雄、森川義信／鮎川信夫、西崎晋／岩本修蔵、川島豊敏／上林猷夫、楠田一郎／岡田芳彦、宮西鉦吉／扇谷義男、石渡喜八／長島三芳、左川ちか／北園克衛、饒正太郎／小林善雄、永田助太郎／近藤東、牧野虚太郎／中桐雅夫、澁江周堂／池田克巳、岡本彌太／島崎曙海。

戦時下、『新領土』や『文芸汎論』等に作品が掲載されていた若き詩人たちの名が見られるなか、中村稔による立原道造が「死んだ仲間」の冒頭に置かれているのも、『詩学』特有の接統の意識が垣間見られるように思われる。また、鮎川信夫による「森川義信について」は、鮎川が記した森川に対する文章のなかでもっとも哀切な思いを響かせて作品の強度を照らしているもので、この特輯にかなった名文である。

彼はただ生きていて、僕達のそばに居てくれさえしたら、それだけで平安と慰めを与えるような男であつた。詩なんか書いてくれなくなつていい、ただ生きていてくれたら……しかし残念なことに、そんな僕の嘆きを、彼の詩は男々しく拒絶している。僕達は今更ながら〈完成〉の底に死があることを思わずにはいられない。

前号の「編輯後記」で木原は同時代の「詩人個人を研究」する動態的な視点を記していたが、同時代詩人であったはずの「死んだ仲間」を、仲間の批評で特輯することによって、その作品を生かし続けてゆく接続の意識も注目に値する。

#### 4 詩学研究会

谷川俊太郎、茨木のり子ら「權」の詩人たちを育てていった「詩学研究会」は、『詩学』の貢献を語るものとしてよく知られている。ここでは、その内実をつぶさに見てみたい。三巻五号（昭23・6）に掲載された、詩学研究会の創設を知らせる「詩学研究会について」は、次のようなものであった。

詩壇は常に新しき詩人を待望してゐる。しかしながら真に新しき詩人は偶然に出現するものではない。その時代を背景とした歴史的な必然のなかに生まれる。本誌は茲に詩壇の公器たる自負と光栄との上に詩学研究会を組織し、新しき詩人の培養基たらしむとする。／一、詩学研究会は詩文学誌〈詩学〉を中心とする詩の研究機関であり、本部を東京に、支部を各府県に置く。／二、会員資格は詩文学誌〈詩学〉の購読者であれば良く、特別の規定はない。／三、会員の研究作品は編輯部にて銓衡の上詩文学誌〈詩学〉誌上に発表する。／四、支部には委員若干名を置き、研究会の事務を委任する。／五、研究会は毎月一回支部毎に開き、希望に依り、毎年二回程度本誌編輯部主催の講演会又は研究会を開くことが出来る。／六、研究作品は毎月二十日締切とし、送稿及び通信はすべて東京都港区芝西久保巴町十二 岩谷書店編輯部 詩学研究会宛に送らねばならない。／右の外種々会員諸氏の便宜を計るべく随時計画を立案する予定である。ついでには購読者各位の中で熱意ある諸氏に、研究会支部の委員としてご活躍を願ひたいと思ふので、御希望の向きは至急当編輯部へ連絡をとらねばならない。

「詩壇の公器」、「新しき詩人の培養基」、「詩の研究機関」といった役割の自認があり、さらに、「支部を各府県に置

く」とする組織化が当初より構想されている点が目を引く。

そして、この三号あとから「詩学研究作品」コーナー（3巻8号 昭23・10）が登場する。磯永秀雄「遍路」以下八篇が選ばれ、以降はほぼ毎号にわたっているいろいろな詩人が入れ替わり立ち替わりあらわれている。村野四郎は翌号の投稿時評「夏日覚書」（3巻9号 昭23・11）で、『詩学』投稿詩篇は「他の新聞や雑誌の投稿詩に比較すると、数等たかい水準にあるように感じた」としながらも、それらは「こじんまりしたユニフォームを一樣に身につけていた」「秀才型」だとし、「つつましいユニフォームにはおさめ切れぬような異常骨格の詩精神には遂に遭遇できなかつた」と述べている。また、同号編輯後記では木原が、「研究作品も順次その熱意を加へつつあり多くの佳篇を得ることが出来て幸ひである。僕らは此の研究作品に依つて、ひとつのドアが開かれることを多くの期待をもつてみつめてゐる」としており、初発の段階から「詩学研究作品」には、比較的高水準の作品が寄せられていたことがうかがえる。

折々掲載される「詩学研究會通信」からは、「東京詩学研究會」をはじめ群馬、神奈川といった東京近郊にはじまり、全国に拡がって行くさまを見てとることができる。その内容を四巻一号（昭24・1）の「通信」に見てみると、東京研究会の例会では、西脇順三郎による「シュルレアリスム文学論に関する講話があり、続いて質問討議を行った」といった報告がなされており、充実の様子が知られる。また、「地方在住の会員申込が一県で十名に達した場合には編輯部より会員各位の相互連絡を計るために住所録を送附」するので、「研究会の組織を作つて戴きたい」とあり、こうした簡易かつ確実な形式が、それぞれの地方の研究会形成に効果的であつたのではないかと推測される。さらには、編輯部が「鋭意立案中」とする「詩学研究會の行動計画」について、会員からの「良いプラン」「希望」によつて「更に活発な運動を展開したい」と、計画立案への参加を促してもおり、相互的で近距離にある『詩学』というイメージが、この研究会の発足によつて形成されようとしていたことがわかる。こうしたことは、「編輯後記」（4巻6号 昭24・8）にもあらわれており、「詩壇の公器」としての位置は次第に築かれてゆきつゝある」が、「新人発掘の仕事はまだ始められたばかり」、「詩学研究會」や「投稿」の作品は村野四郎らによる選を経て「程度は相当高く」あるも

の、「まだまだ読者諸氏の積極的な協力なくしては成績を上げる事は出来ない」、「恐れたり、遠慮したりせずにごんどん作品を送つて頂きたい」と呼びかけている。

こうしたなかで、白石かずこが詩篇「時……」で「詩学研究作品」（4巻3号 昭24・4）に登場する。

死んだやうに／海はしづかで／その夜あなたの唇は／はなのやうにひらひらと舞いてき／そこには果樹園などの／かをりがたゞよひ／しづかに待ちうけてゐる／哀しいのちがありました／手にいだと／そこはかとなくきえいり／胸によせると／なみだほどにざわめき／ふりすてると／かたりとおとし／興ざめた時計の針の／音でした。

秘めやかでリズムミカルなやわらかい世界観を持つ白石の作風は目を引く。選者の村野四郎は、その評（「脈脈をさぐす―投稿詩短評―」）の冒頭で白石作品を取りあげ、「一応抒情詩にはまとまつているが、言葉の使用法がぎりぎりの合目的性をかいているので、イメエヂがぼやけ、エスプリもふやけて見える」とするものの、「ふりすてると」以下の最終四行が「この詩にやや形象的な明確さを与えて魅らせている」と評価する。

白石登場の一年後、「詩学研究作品」（5巻8号 昭25・9）に、谷川俊太郎（「秘密とレントゲン」「五月の無智な街で」のちに『二十億光年の孤独』収録）、茨木のり子（「いさましい歌」）が揃って登場する。ここには友竹辰比古の作品も掲載されており、同号は次世代のはじまりを胚胎する象徴的な誌面を有していると言える。選者村野は同号の「テクニツクの方法―研究会作品評―」で、谷川作品に新鮮さを見るものの、「五月の無智な街で」における末尾近くのフレーズ、〈天上からの街頭録音のために僕はたくさんの質問を用意している／しかし地獄からの脅迫のために僕は武器を持たぬ〉について、「おもしろいメタフォアだが、それならどうするという最もシイリアスな質問に対して、結局この作品では充分にオリジナルな回答が得られていないという点が気にかかる」と指摘している。だが、谷川本人は本作品を『二十億光年の孤独』（昭27・6 創元社）に収録する際にも、手を加えることはしていない。一方の茨木作品については、「このファンタシイには相当にはげしい精神の喘ぎが感じられる。その原色的な感情の表出は見事である」と評価されるものの、本作品を単行詩集に収めることはなかった。このあたりのズレも、詩人たちの受けとめ方を考え

る上で興味深い。

## 5 谷川俊太郎という存在

谷川の登場を見た数ヶ月後、「詩壇時評」（6巻1号 昭26・1）は、谷川に対して実に複雑なもの言いをしていて目を引く。先の「詩学研究作品」に二作品が掲載されてほどなく、『文学界』（4巻12号 昭25・12）に「ネロ・他五篇」が三好達治の「蛇足言」とともに掲載されたことを受けての内容であるが、二誌に掲載された詩風の異なりを前にとまどう様子があからさまである。それは、皮肉たっぷりにはじめられる。

ところで、「文学界」が三好達治のあとがきをつけて谷川少年の詩を紹介したのは、何かの気紛れかもしれないが、一応興味のあることだ。この少年は、親父（谷川徹三）ゆづりかもしれないが、ともかく有望な秀才と見えた。

そして、『詩学』『文学界』両誌への掲載作品について、「まるで関係のないやうな別の風格をそれぞれあらはしている」ことについて、次のように訴えてみせる。

いかに才文にめぐまれた少年とは言へ、こんな変貌がさうたやすくありえていいのだろうか。それとも、そんなことが気掛りになると言ふのがもともと無意味なことでもあるのだろうか。ただ一人の少年のこと、それほど気にすることはないと言つてしまへばそれ迄だが、ともかくもきいてくれたまへ。これは、日本に本当の「詩の伝統」がないからなのだと言ひたいのだ。

ヨーロッパ詩の伝統にもふれながら、日本には「外から制約する」「伝統」が欠如しているために、「谷川少年」は「軽々と自己をたやすく変化」させ得たのだと言う。若き詩人の変幻自在な詩風にとまどい、それを「伝統の欠如」へと返そうとする意気込みが、「ただ一人の少年」に留まり得ない谷川俊太郎という新しい存在を、かえって強く刻印し

ている。<sup>5)</sup>この翌号（6巻2号 昭26・2）に「詩学審査委員会推薦作品」が掲載され、白石かずこらの作品とともに、谷川の作品（「山荘だより」）もふくまれた。これに自筆の「詩学審査委員会推薦詩人略歴」が付されており、ここで谷川は自身について次のように記している。

一九三一年東京に生まれ、都立豊多摩高校卒業。約一年前より友人に刺激されて作詩し始めた。谷川徹三氏に認められたのに気をよくし、詩学研究会等に投稿をした。その後三好達治氏のご好意で「文学界」に数篇が載った。

前号の「詩壇時評」の内容に対応させ、父谷川徹三に「認められた」、「三好達治の「ご好意」と、恵まれた経緯を他人事のようにすらりと記述してみせている。こうした背景をみずから明かしてゆくところには、それらのみに拠るのでない自作に対する自負を読み取ることができる。それが自他ともに認めるものであったことは、同号の嵯峨信之・木原孝一・森道之輔・黒田三郎・中桐雅夫・鳥見迅彦・岩本修蔵による「審査委員会推薦詩合評会」において、「生まれつきのうまさ」（中桐）、「生地が良い」（木原）、「相当素質がい」（岩本）といった指摘が繰り返されているところからも明らかである。恵まれた資質、それを誰もが感得していたのが谷川俊太郎という新しい存在だったのである。この後、「詩学研究作品」に先行して登場していた友竹辰、白石かずこの作品が一般の「作品」コーナーに掲載される（6巻4号 昭26・5）のと同じく、谷川の作品（「想う人と動く人についてのノート」）も同様に「作品」コーナーに掲載（7巻1号 昭27・1）され始め、白石の『卵のふる街』（昭26・9 協立書店）、続いて谷川の『二十億光年の孤独』（昭27・6 創元社）と、「詩学研究会」に投稿していた新詩人たちの第一詩集が上梓されてゆく。それぞれ「詩学研究作品」登場から二年で詩集出版を迎えている。

高橋宗近による「書評」谷川俊太郎『二十億光年の孤独』（7巻8号 昭27・8）<sup>6)</sup>では、詩風の「素直さ」を指摘するとともに、「感能とか情緒とかいふ点」に特色はないが、「ザツハリッヒなものの方の新鮮さは、時々読者に軽快なショックを与えるだけのものを持つている」としながら、「読者の思考の内部にまで浸透して、思考の回転そのものを交代させるような深さも力も乏しい」と指摘、「才気に比べて、またいろいろな経験が足らないのかも知れぬ」、「二年少

者の文学」の領域からそれほど出ていないとすら見られる点もある」、そして、「人間的な孤独を宇宙的に定着」させようとする「宇宙的なもの」が「初歩の天文学的宇宙像に仮託」されている向きを述べつつ、今後の期待を好意的に込めて結んでいる。この二年後、これまで批評の対象とされてきた谷川ら二十代の詩人たちによる座談会「二十代の発言―座談会―」（飯島耕一・高橋宗近・谷川俊太郎・大岡信・中村稔・川崎洋・山本太郎・嵯峨信之・木原孝一）（9巻1号昭29・1）が催され、そこで谷川自身は「モラル」と「宇宙的なもの」とをあわせて、「ぼくのモラルというのは社会的というのではない」、「もつと自分では宇宙的なものという感じがする」、「人間に対する自分の位置よりも宇宙に対する自分の位置、そういう意味のモラル」であると述べる。中村稔がそれに対して「理解できない」、「神様が出て来る」ということかと問うたのを受けて、「自分を越えた力を感じている」、「空とか何とかは全部非常に非人間的なもの」としながら、「非常に遠いことにかかわらずわつていながら、反面自分の身近なものに日常生活的と言えくらゐに愛情を感じたりする」とも応えている。それは、先行世代（三十代）が戦争を「肉体的に感じている」のに比して、「観念的に感じるようなところがある」としているところとも関わっていそうであるが、同じ二十代詩人ではあつても、中村が「高橋君とかぼくはむしろ三十代の方に近い」と言えば、先の書評者高橋も「ぼくもちよつとそういう気がするな」と反応しており、谷川より四年年長である彼らと谷川との戦争に対する経験の差が、作品創作や感受の仕方にも「差」を生み出しているようであることも、谷川俊太郎という存在をとおして浮き上がっている。

## 6 鮎川信夫の先見性

村野四郎の「詩学研究作品」選者引退が告げられる（『編輯後記』6巻11号昭26・12）と、翌号（7巻1号昭27・1）から、長江道太郎、鮎川信夫、小林善雄が選者となり、編輯部から嵯峨信之、木原孝一が加わって「作品合評」をすることが報告（「選者の言葉」）され、五名による「第一回研究会作品合評」が掲載された。すると、鮎川信夫の新人

発掘における先見性が際立って見えてくるようになる。茨木のり子、吉野弘に関わっての発言を例にとってみたい。

「第七回研究会作品合評」（7巻7号 昭27・7）における茨木のり子「民衆」をめぐってのやりとりでは、長江や嵯峨が「態度」や「思想性」を取りあげようとすると、鮎川は、「詩によつてのみ表現されうるようなムードとか感情、あるいは論理、直観、そういうものが表出されている」ところに「感心」しているのであり、「思考の線と情緒の線とが、ほかの詩に見られないような、うまいぐあいに、屈折をしているところは、ちよつと珍しい」と評価する。さらに長江が、「一番おもしろいことは、女でありながら男のやうな、ある意味では男女といふ性別を考えさせない作品」であるとした点に対して、鮎川は「その言い方に対してむしろ疑問がある」として、次のように指摘する。

これはむしろ今まで見てきた中で、女の人の詩の持つている一つのいい特長を持つていると思うのです。つまりイマージュとか印象とか、そういうものが、非常に通俗的な知性とか論理というものとコントラストをなしておるということなんです。たとえば今までの詩を見て飽きてしまふとかつまらないとか思うのは、展開がわかつてしまふのだ。それがここでは何が出るかわからない。ひよつとして、十行はつまらなくても一行ぐらいおもしろいものが出て来るといふ期待を持たせると思うのですよ。

男性論理や既成の思想性に絡め取られない独自性を評価するこの指摘は、茨木作品の個性をいち早く見出し、詩人の伸びてゆく方向性を示し得た評と言える。

「第十回研究会作品合評」（7巻11号 昭27・11）では、吉野弘の代表作ともなる「I was born」について、鮎川が鋭弁を奮う。この詩があらわれた時点では、意外なことに形式論が持ち出されて評価が分かれている。小林が「非常に散文的すぎる」と述べ、木原が「コントになるだろうと思う」と続けると、鮎川はその反応を予想していたとしながら、そうした形式の中で「この方がずつといい」と評価して次のように中身にふれる。

上手ですよ。これは……。[I was born]から始まつてかげろうを出すところなんか、子どもの位置にもなり、子どもが親にもなるというように入り組んでいます。

さらに、「ジャンルの問題はこの場合どうでもいい」、「おもしろいか、つまらないか」を問題とすべきであると繰り返し、「そうした形を度外視して、これには感心した」と、さらに終盤で形式論に楔を打ち込んでいる。他の評者が形式にこだわる中、作品の世界観を評価軸に孤軍奮闘の感があるが、先の茨木作品に対したのと同様に、のちの評価につながる中心的なところを押さえた先見的な評が、ここでも鮎川によって強く示されているのは印象的である。

鮎川ら「荒地」と茨木ら「權」の詩人たちは、現代詩史のなかで、思想性と感受性をそれぞれの特質として理解されてきたとおり、その作風において異なっているが、鮎川信夫の「評」をとおして見えてくるのは、自身の描く世界観とは異なった後続世代の作品の個性、伸ばすべき心棒にあたると思われるところを深部で捉えて的確に評価してゆく真摯な姿勢である。優れた詩人の直観に支えられた作品に対する謙虚な向き合い方が、まちがひなく続く詩人たちを育ててきたのだと知られる。また、「合評会」では評価の分かれた吉野の作品ではあるが、それはきわめて高質な次元でのこととがらであり、『詩学』としては次のような取りあげ方をしていることが前提にある。

研究会作品として頭角を表し、多くの注目を惹いてゐた川崎洋、船岡遊治郎、吉野弘、三氏の作品をその力量の点からも詩界に紹介するに充分なものと思ひ、敢へて各位の承認を得て推選作品とした。新しき詩精神の発掘は本誌の義務である。(木原孝一「編輯後記」同号)

この後も「研究会作品」については、評者を入れ替え、「合評」において各作品に対する得点を表にするなどの試みをしてみたりと、新人育成について心を砕いている様子が随所にうかがえる。この一年後、「茨木のり子氏は最近川崎洋氏と共に詩誌權を発刊、新鮮な詩精神を燃やしている」(木原孝一「編輯後記」8巻8号 昭28・8)として、いよいよ『權』が創刊(昭28・5)され、翌年には「われらの仲間」のコーナーに川崎洋が「ある日の例会(權)」(9巻4号 昭29・4)を一頁にわたってユーモラスに執筆しており、活躍めざましい。

近代詩史との接続、戦時下との接続、同時代との接続、そして後進との接続をとおして『詩学』におけるはじまりの一〇年を概観してきた。これらを体現するのが「人」であるのは述べたとおりであり、「權」の詩人たちをはじめとす

る新人育成はその最たるあらわれと受けとめることができる。このはじまりに続く昭和三〇年代には、当初に掲げた「公器性」に対する捉え返し、「權」の解散など、またあらたな展開があらわれてくる。続稿を期したい。

## 注

- (1) 『戦後詩誌総覧②戦後詩のメディアII』(平20・12日外アソシエーツ)
- (2) 二誌の方向性および『詩研究』の総目次を紹介した研究に、猪熊雄治「詩誌『詩研究』『日本詩』(学苑)平30・3」がある。
- (3) 「第II部 鮎川信夫の「荒地」第一章「荒地」の輪郭と根拠」(『空白の根拠―鮎川信夫と日本戦後詩―』平31・2 思潮社)
- (4) のちに友竹辰として「權」の同人となる。友竹はすでに数年前から登場し、全国詩誌推薦詩にも詩誌『VISION』から登場している。
- (5) 加藤邦彦「谷川俊太郎の登場、その同時代の反応と評価―『二十億光年の孤独』刊行のころまでの伝記的事項をたどりつつ―」(『るる』平28・5)は、三好達治が『文学界』に谷川の詩を紹介したことについて、「『詩学』の役割を奪いかねないもの」であり、「そのことは『詩学』にとって非常に惜しく、かつ腹立たしい出来事だったに違いない」と推測、この「詩壇時評」には「『文学界』に谷川を奪われるかたちとなった『詩学』の側の複雑な感情をみることができる」と捉えている。
- (6) 加藤邦彦「谷川俊太郎『二十億光年の孤独』が「宇宙的」な詩集になるまで」(『るる』平30・10)は、当書評を「谷川と宇宙を結びつけて論じた最初のもの」と位置づけており、注(5)論文では、これを「谷川に対してかなり批判的」と評した上で、その理由を『詩学』の「新人育成の使命感」に見、『文学界』掲載詩篇との詩風の異なりに言及した「詩壇時評」の「延長線上にある」と捉えている。

\*本稿は、日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C)「雑誌『詩学』『現代詩』『ユリイカ』を中心とする昭和30年代詩の研究」に拠る成果である。また、栗原敦実践女子大学名誉教授より、愛知県立大学長久手キャンパス図書館へ、『詩学』の貴重な初期四冊(1巻2号、2巻6号、3巻2号、3巻3号)をご寄贈いただき、欠本を補っていただいた。記して心よりの感謝とお礼を申し上げる。